

受用と成熟

2019/06/08 飯山 等

《利用》・《受容》・《受用》

『広辞苑』

《利用》= ①利益にかなるように物を用いること。役に立つように用いること。②方便に用いること。だしにつかうこと。

《受容》= ①受け入れて取り込むこと。②(芸術などの)鑑賞・享受

じゅよう

《受用》= 受け入れて用いること

『新明解国語辞典』

《利用》= 本来そのためにあるわけではないものを、うまく使って何か役に立たせること

《受容》= 受け入れて、自分のものとして取りこむこと。

《受用》= 採録されていません。

《生長》・《成長》・《成熟》

『広辞苑』

《生長》= ①(史記封禅書)うまれと育ち。うまれ育つこと。②俗には発育と同じ意味で用い、生物学では生態の量の増加を指し、形態形成あるいは形態変化にたいしていう。成長。

《成長》= ①育って大きくなること。育って成熟すること。②生長の②)と同じ。

《成熟》= ①穀物や果物が十分にみのること。また、人間の体や心が十分に成育すること。②物事が最も充実した時期に達すること。

『新明解国語辞典』

《生長》= ①[草木などが]育つこと。②生まれ育つこと。

《成長》= からだや心が育って、一人前の状態になる(近づく)こと。[時日の経過と共に、高い段階に発展し長足の進歩を遂げる意にも用いられる]

《成熟》= ①果物や穀物が生長して、食用に適する状態に達すること。②人間の精神・肉体が発達して、独立した営みが可能な状態に達すること。

《利用》を転じて、《受容》、さらに《受用》へ

受容; 受けとるのが因位

受用; 受けとることを通して、その心を生きていくのが果位。

A; 樹木希林のことば

私は「なんで夫と別れないの」とよく聞かれますが、私にとってはありがたい存在です。ありがたいというのは漢字で書く、「有難い」、難が有る、と書きます。人がなぜ生まれたかと言え、いろんな難を受けながら成熟していくためなんじゃないでしょうか。今日、みなさんから話を聞きたいと思っただけなのは、私がたくさんのダイバダッタに出会ってきたからだだと思います。もちろん私自身がダイバダッタだったときもあります。ダイバダッタに出会う、あるいは自分がそうなってしまふ、そういう難の多い人生を卑屈になるのでなく受けとめ方を変える。自分にとって具体的に不本意なことをしてくる存在を師として先生として受けとめる。受けとめ方を変えることで、すばらしいものに見えてくるんじゃないでしょうか。

やっぱりがんになったのは大きかった気がします。ただ、この年になると、がんだけじゃなくいろいろな病気にかかり、不自由になります。腰が重くなって、目がかすんで針に糸も通らなくなっていく。でもね、それでいいの。こうやって人間は自分の

不自由に仕えて成熟していきんです。若くても不自由なことはたくさんあると思います。それは自分のことだけでなく、他人だったり、ときにはわが子が子だったりもします。でも、その不自由さを何とかしようとするんじゃないやなくて、不自由なまま、おもしろがっていく。それが大事なんじゃないかと思うんです。(不登校新聞記事より)

* 無難; 欠点がないこと。また、とりたてて避難すべき点もないが、さしてすぐれてもいないこと。(大辞林)

観経疏三心釈 通常の読み⑦と親鸞独自の読み④

「須」; (一動)①もとめる。もちいる。⑦の必要とする。④要求する。④採用する。

二(助動)①当然である。すべからず…べし。

① 一切衆生身口意業所修解行必須眞實心中作不得外現賢善精進之相内懷虛假貪瞋邪偽奸詐百端惡性難侵事同蛇蝎雖起三業名爲雜毒之善亦名虛假之行不名眞實業也

⑦ 一切衆生の身口意業所修の解行、かならずすべからず眞實心のうちに**なすべきこと**を明かさんと欲す。外に賢善精進の相を現じ、内に虚仮を懐くことを得ざれ。貪瞋・邪偽・奸詐百端にして、悪性侵めがたく、事蛇蝎に同じきは、三業を起すといへども名づけて雑毒の善となし、また虚仮の行と名づく。眞実の業と名づけず。

④ 一切衆生の身口意業の所修の解行、かならず眞實心のうちに**なしたまへるを須るんこと**を明かさんと欲ふ。外に賢善精進の相を現ずることを得ざれ、内に虚仮を懐いて、貪瞋邪偽、奸詐百端にして悪性侵めがたし、事、蛇蝎に同じ。三業を起すといへども、名づけて雑毒の善とす、また虚仮の行と名づく、眞実の業と名づけざるなり。

② 不善三業必須眞實心中捨又若起善三業者必須眞實心中作不簡内外明闇皆須眞實故名至誠心

⑦ 不善の三業は、かならずすべからず眞實心のうちに捨つべし。またもし善の三業を起さば、かならず**すべからず**眞實心のうちに**なすべし**。内外明闇を簡はず、みなすべからず眞實なるべし。ゆゑに至誠心と名づく。

④ 不善の三業はかならず眞實心のうちに捨てた**まへるを須るよ**。またもし善の三業を起さば、かならず眞實心のうちに**なすべし**を須るべし。内外明闇を簡はず、みな眞實を須るがゆゑに至誠心と名づく。

③ 又廻向發願願生者必須決定眞實心中廻向願作得生想

⑦ また廻向發願して生ぜん願するものは、必ず**すべからず**決定眞實心のうちに廻向し願じて、得生の想を**なすべし**。

④ また廻向發願して生ずるものは、必ず決定して眞實心のうちに廻向した**まへる願を須る**て得生の想をなせ。

『蓮如上人御一代記開書』

180 蓮如上人、仰せられ候う。「信のうえは、とうとう思ひ申す念仏も、また、ふと申す念仏も、仏恩に備わるなり。他宗には、親のため、また、何のため、なんどとて、念仏をつかうなり。聖人の御流には、弥陀をたのむが念仏なり。そのうえの称名は、なにごともあれ、仏恩になるものなりと、仰せられ候う云々

『一念多念文意』

⑦ 如来の本願を信じて一念するに、かならず、もとめざるに無上の功德をえしめ、しらざるに広大の利益をうるなり。自然に、さまざまのさとりを、すなわちひろく法則なり。法則といは、はじめて行者のはからいにあらず、もとより不可思議の利益にあずかること、自然のありさまともうすことをしらしむるを、法則といはなり。聖 539 頁

④ 「是名正定之業 順彼仏願故」といは、弘誓を信ずるを報土の業因とさだまるを、正定の業となづくといは、仏の願にしたがうがゆゑにと、もうす文なり。聖 541 頁

⑦ 自力といは、わがみをとのみ、わがころをたのみ、わがちからをたのみ、わがさまさまの善根をたのみとより。聖 541 頁
④ 「大宝海」は、よろずの善根功德みちまわまるを、海にたとえたまう。この功德よく信ずるひとのころのうちに、すみやかに、とくみちらぬとらしめんとなり。しかれば、金剛心のひとは、しらず、もとめざるに、功德の大宝、そのみにみちみつがゆゑに、大宝海とたとえたるなり。聖 544 頁

④ 浄土真宗のならいには、念仏往生ともうすなり。まったく、一念往生・多念往生ともうすことなし。聖 546 頁